

## 小・中学校における効果的な英語インプットのあり方に関する研究(1年次)

— “KYOTO English Shower Project Plan” の開発と提示 —

矢野 智子 (京都市総合教育センター研究課 主任研究員)

教室で子どもが取り入れた英語インプットは、「気付き→理解→内在化→統合」のプロセスを経て、アウトプットにつながるといわれる。しかし、日常的に英語を使うことがほとんどない日本の環境下では、英語インプットの機会は限られている。そこで、本研究では、学校生活の中で英語インプットの機会を増やすことで、子どもができるだけたくさんの英語に触れられるようにすることを目的とする。そのために、指導計画や教材をプロジェクト・プランとして提示するとともに、“KYOTO English Shower Project”事業を実施する学校を支える体制づくりを行う。その結果、どのような影響や効果をもたらすかについて検証する。本事業は、外国語教育の充実を図る事業の一つとして位置付けられており、学校と教育委員会(研究課・学校指導課)の連携のもと、取組の拡充と質的充実を目指して取組を進める。

## 第1章 いま、なぜEnglish Showerなのか

## 第1節 外国語教育の目標と付けたい力

外国語教育では、学習指導要領の目標にあるように、小学校ではコミュニケーション能力の素地を、中学校ではコミュニケーション能力の基礎を養うことを目指している。指導者は、コミュニケーション能力の観点から一貫した目標のもと、小・中・高等学校の連続性や生涯教育への見通しをもつとともに、領域と教科の枠組みの違いを超えた連携を図りながら取組を進める。

今後は、国の英語教育改革をふまえ、京(みやこ)・英語スタンダードにあるように、グローバル社会を主体的に生きる上で必要な資質・能力の一つとして、実践的な英語コミュニケーション力を育てていく必要がある。

## 第2節 京都市英語教育の現状と課題

外国語教育についての全市実態調査によれば、小学校では、学級担任やALTとのTTで進める授業が次第に整ってきた一方で、体制づくりや、担任の教室英語力向上などに課題がみられた。また平成23年度から、授業以外で英語の取組を実施する学校が減少したことが明らかになった。

中学校では、外国語活動導入以降、教員が小中連携の必要性や四技能の総合的な育成を意識した授業づくりを進めていることが明らかになった。

今後の国の英語教育の大きな変革を注視しつつ、必要な力を確実に身に付けられるようにしていく必要がある。

## 第3節 先行研究から

本節では、第二言語習得理論の知見を生かし、枠内三点のインプット効果について考察した。

- ・英語絵本の読み聞かせの取組
- ・多読の取組
- ・リスニング教材を活用した取組

## 第2章 “KYOTO English Shower Project”事業の具現化に向けて

## 第1節 研究仮説

英語のアウトプットにつながるインプットの機会を校内でつくるために、事業の運営体制の確立と内容の提示についての研究仮説を設定した。

## 【運営体制の確立】

学校と委員会の連携を図るための体制を確立することで、事業を全市に拡充することができるか。

## 【内容の提示】

小・中学校において、授業以外に英語インプットの機会を日常的に作ることで教育的効果をもたらすことは可能か。またどのような教材や指導計画が考えられるか。

## 第2節 本事業の目的と概要、運営方法

本事業の目的は、「日常の学校生活の中で、子どもが英語に触れる機会を充実させること」である。学校と委員会が連携を図り、取組を広げ、深めていくことを目指す。

英語インプットは、継続的に取り組んでこそ、その効果が期待できる。計画的・継続的に事業を進めるためには、学校体制での仕組みづくりと、それを支える支援体制の確立が不可欠である。そこで、学校と委員会が協働して取り組む事業体制を構築し、事業の検証や評価の方法も含めて提示した。学校は、自校の学校教育目標や目指す子ども像を踏まえ、取組を点検し、更によりよい取組へと改善していく視点をもつことが求められる。

### 第3節 研究課から発信するプロジェクト・プラン 学校の取組を支援するために、研究課から、枠 内のプロジェクト・プランを示した。

- i 絵本を活用したモジュール指導案や研修資料の提  
示 (小学校)
- ii 多読の取組の提示  
(おもに中学校・一部の小学校)
- iii 英字新聞・音楽を活用したリスニング教材の提示  
(中学校)
- iv 教員の英語力向上のための取組の提示 (小学校)
- v 校内環境の整備 (小学校・中学校)
- vi ALTと連携した取組の提示 (小学校・中学校)

それを受けて学校は、枠内の三点を踏まえて計  
画を立て、到達目標を決めて実践する。

- ・取組はインプット理論に基づいているか。
- ・取組は学校の子どもの実態に合っているか。
- ・取組は自校の学校教育目標とつながっているか。

## 第3章 “KYOTO English Shower Project” 事業の実施 第1節 事業運営の実際

図1に示した通り、事業を円滑に運営するため、  
研究課・学校指導課を組織の中心に据え、各課・

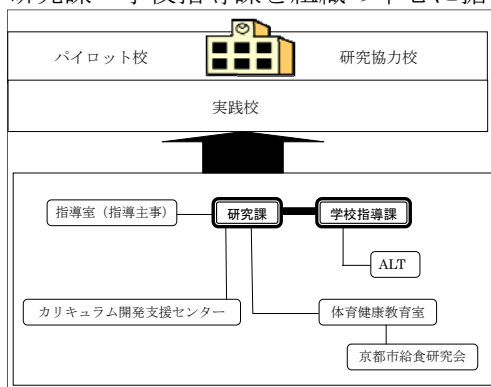


図1 組織間連携の構造

研究会の協力を得ながら、支援体制を整えた。学校は、研究協力校・パイロット校・実践校といったそれぞれの役割のもと、年間計画に基づいて取組を進めた。それを支援する委員会は、ポータルサイトをはじめとした情報発信の手だてや、交流会による発信・交流や評価の仕組みなどを整え、取組を支援した。

### 第2節 取組の実際

パイロット校・実践校および研究協力校の取組を常時交流することを目的として、委員会では“KYOTO English Shower Times”を発行している。委員会が学校の実践取材し、イントラネットから発信することで、各校が取組を参考にできるようにした。そこでは、学校体制や取組内容の視点から、特徴的・発展的な取組を紹介している。右上枠内はその詳細である。

#### 【組織の視点からみた事例】

- ①校内体制の確立
- ②委員会活動・生徒会活動との連携
- ③ALTとの連携
- ④同僚性の構築

#### 【内容の視点からみた実践事例】

- ①絵本の読み聞かせの実践事例
- ②英字新聞を活用したリスニングの実践事例
- ③音楽や映像に触れる実践事例
- ④効果的な校内環境の実践事例
- ⑤給食献立紹介の実践事例

## 第4章 事業の更なる充実を目指して

### 第1節 事業の成果と課題

パイロット校を対象とした中間調査から見えてきた事業の成果としては、各校が、管理職のリーダーシップのもと、学校体制で、時間を決めて継続的に取り組み、日常的に英語に触れる校内環境づくりを進めていることが挙げられる。小学校では、外国語活動の目標を意識して取り組み、中学校では、普段の授業との連動を意識して取り組んでいることが明らかになった。そして、小・中学校とも、指導者や子どもにプラス面の変容が見られた。

その一方、課題として、45%の学校が実施上の困りや悩みを抱えていることが明らかになった。事業を継続していくためには、取組の目的や趣旨について、教職員間で共通理解を図り、子どもの発達段階を踏まえた内容を吟味して進めることが、今後いっそう求められるであろうと考える。

学校を取組を支える委員会は、各校が、主体的に実践を進められるように支援をするとともに、全市の取組を俯瞰しながら事業を進めていく必要がある。

### 第2節 今後の発展的可能性と展望

枠内に示した五つの視点から、この事業の今後の可能性と展望を探る。

- ①国や市の今後の英語教育改革の動きから
- ②英語教育の課題から
- ③子どもの発達段階から
- ④On the Job Training (OJT) の視点から
- ⑤学校を支える視点から

学校は、今後ますます、持続可能で自立した取組を進めていくことが期待される。そのためには、学校と委員会が連携を強化し、英語教育改革の動きを見据えた上で、様々な視点を踏まえて取り組んでいく必要がある。